一心寺かわら版

第六十一号　令和六年三月発行

持名山一心寺　検索

HP

観音寺小学校「観音寺のすてき」講演

観音寺小学校から「観音寺のすてき」ゲストティーチャーの依頼がありました。内容は、「よるしるべ」のボランティア活動、「よるしらべ」開催の思いとお寺の役割についてです。二月十五日、二年生にお話し。

まず、お寺のことと「よるしるべ」に協力する理由について。「よるしるべ」に参加した当初、お寺は仏さまに手を合わすところでしょう、どうしてイベントに協力しているのですか、と尋ねられたことがあります。

十年以上前、企画ディレクターとアーティストが一心寺を会場にとお願いに来ました。彼らの話を聞いて「よるしるべ」とお寺の思いは共通していると感じ、一緒にやりましょうと快諾しました。

一心寺は天台宗として創建。一五七九年に観音寺城を築いたとされる香川景全が当時の伽藍を整備しました。一五八五年に豊臣秀吉が四国を平定すると、上坂丹波上が居城し、高丸城と呼ばれました。一六九八年の観音寺古地図に城趾が描かれています。明治時代までは内堀跡の一部が池として残っていました。その城の門のひとつが現在の一心寺山門です。

お寺はどのような場所でしょうか。私が子供の頃は、かくれんぼ、缶けり、野球、お寺は遊び場でした。また、文化の場でした。国宝の多くがお寺にあることで分かるように、芸術文化はお寺を場として発展しました。音楽は東西を問わず、神仏に捧げるものとして生まれ、落語は僧侶のお説教から生まれました。また、学びの場でした。江戸時代は寺子屋、近年まで様々な習い事の場でした。一心寺本堂は、現在の観音寺第一高等学校の前身、丸亀中学校三豊分校創立当時の校舎でした。そして、行政の場でもありました。江戸時代の寺請制度で、戸籍の管理、旅手形の発行など、様々な役割を担いました。まさにお寺は地域の中心、そこに住む人と共にありました。

三豊分校仮校舎　一心寺（市内幸町）
（明治34年から35年3月まで、丸亀中学三豊分校の1・2回生がここで学んだ）

では、「よるしるべ」はどういうものでしょうか。当時のパンフレットに「二〇〇四年から始まった「ドピカーン観音寺」というまちづくりプロジェクトから生まれた「よるしるべ」は、観音寺の歴史、風土、習慣などを要素に構成されたアート作品を道標に、幻想的な夜の街を楽しむまち歩きです。夜の商店街と迷路のような路地裏で展開される映像や音楽、パフォーマンス表現を通じて昼間では垣間見ることのできない観音寺の隠れた魅力を発信していきます」とあります。

「よるしるべ」は町づくり、観音寺の魅力を発見、発信する営み。町は人がいないと成り立ちません。お寺も門徒、参拝してくれる人がいないと成り立ちません。魅力ある町、お寺と思っていただいてこそ人が集い、成り立っていく。その思いは共通しています。

続いて、観音寺にちなんだ「よるしるべ」の作品を紹介しました。

【四着織々】古くから染物屋や人形店が立ち並ぶ川原町、京都から移住してきた職人によって拓かれたエリアと伝わっています。映像に浮かび上がる草花は、近くの人形店にあった旧い着物の模様を基に作成。

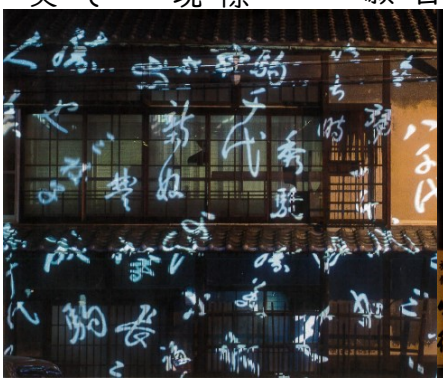
【遊々おいり】昭和二十四年天皇陛下が行幸の際にお泊りになったことで知られる池徳旅館は、地元の人々にも親しまれてきました。このあたりでは昔から結婚式の引き出物に「おいり」を配る習わしがあります。

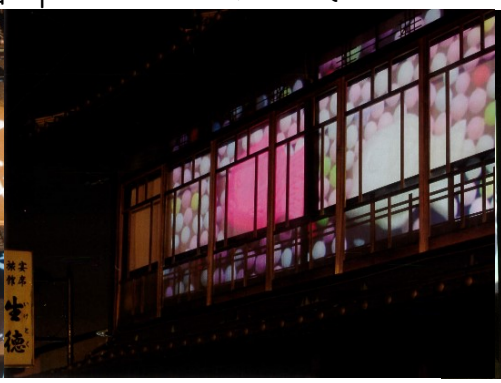
【浮遊亭】この界隈はかつて花街として栄えていた歴史があります。映し出された文字は、芸子遊びが盛んであったことにちなみ、手ぬぐいに印刷された芸子さんの源氏名をそのままの書体で採取したものです。

【観栄通宝】観音寺の観光シンボルとなっている巨大な砂絵、寛永通宝がモチーフ。模様の中に出てくるのは、観音寺を取り巻く豊かな自然の恵の数々。観音寺が栄えてほしいという願いを込めて。

一心寺参道に投影されている映像は、実際の有明浜の波模様を撮影したもの。石畳に現れる海に子供たちも大喜びです。

また、近年、市民参加も促しています。見て楽しむだけでなく、この町で自分も何かが実





現できると感じてもらいたいと考えています。これまでに、観音寺のたぬき伝説、【生木地蔵】、【根上り松】などがモチーフとして取り上げられています。

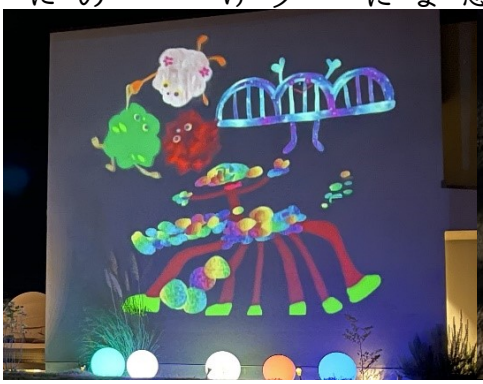
続いては、「よるしらべ」です。お寺で「よるしるべ」で何ができるか、思いついたのが声明雅楽でした。雅楽は、千五百年前の仏教伝来時にアジア大陸から入ってきた音楽や舞と日本古来の歌・舞とを融合したもの。平安時代から千数百年以上の歴史を有する世界最古のオーケストラです。

声明は、仏教儀式において仏・菩薩などへ音曲をともない礼拝供養する宗教音楽のこと。七五四年の東大寺大仏開眼法要が記録に残っています。これらは日本における音楽の始まりとも言えるものでしょう。

一二〇七年、声明の法会に参加した後鳥羽上皇の侍女が感動のあまり出家。上皇が激怒し、法然上人、親鸞聖人は流罪を科せられました。声明は梵唄（ぼんばい＝インドの詠法による歌唱）とも呼ばれます。

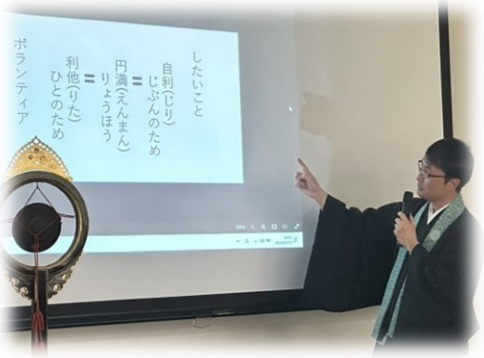
声明雅楽によって感動を届けられたら、少しなりとも魅力ある町、お寺と思っていただけたなら嬉しい限りです。

最後にボランティアの意義を通して仏教のお話し。「よるしるべ」は、灯りをみちしるべに



夜のまち歩きをし、観音寺の文化や風土、隠れた魅力を浮かび上がらせる営み。多くのスタッフは観音寺のためにという思いでボランティアとして参加しています。ボランティアとは社会への奉仕。

しかし、社会のため、人のためにしてあげていると思うと、見返りを求めて、相手が思う通りに喜んでくれないと不満を感じます。それでは続けていくことができません。仏教では「自利利他円満」と説きます。



★自利（わたしのため）＝円満（りょうほう）＝利他（人のため）

人のためになることが自分のためにもなる、楽しめる。両方が満たされることなら長く続けることができます。観音寺小学校の挨拶ボランティアも同じ、挨拶することで周りの方が気持ちよくなり、私も嬉しくなるのでしょう。

是非、色んなことにチャレンジしてみましょう。そして、周りの方が喜んでくれる、私も嬉しい、ということを見つけましょう。また、「よるしるべ」にも遊びに来てくださいと、子供たちに伝えて終わりました。

報恩講報告

一月十五日、報恩講厳修。布教は高松市大乗寺の中原大道師。お釈迦さまは生老病死の現実を説かれた。四十代、五十代の友人が相次いで亡くなり、死からは逃れられないと痛感。鴨長明の『方丈記』、「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず」。八百年前も、お釈迦さまも同じ。生きていくのは大変、苦しみはいつの時代も変わらない。

そして、アントニオ猪木氏のことばから信心を語られました。足を踏み出さなければ道はない。大丈夫と一歩を踏み出したら、それが今日一日になる。そして、振り返ってみたら道があったと気づくのでしょう、と聞かせていただきました。

以前、お寺の掲示板にアントニオ猪木さんのことばから法語を作って掲載しました。

「念仏して　この道を行けばどうなるものか　お釈迦さま『迷わず行けよ』阿弥陀さま『来ればわかるさ』」。

プロレスラー・アントニオ猪木さんの引退時のことば「この道を行けばどうなるものか　危ぶむなかれ　危ぶめば道はなし　踏み出せばその一足が道となり　その一足が道となる　迷わず行けよ　行けばわかるさ」。

これは石川県の浄土真宗僧侶・清沢(暁烏)哲夫氏の詩「道」が元であると言われています。「此の道を行けば　どうなるのかと　危ぶむなかれ　危ぶめば　道はなし　ふみ出せば　その一足が　道となる　その一足が　道である　わからなくても　歩いて行け　行けば　わかるよ」（昭和二十六年十月『同帰』所載）。そっくりですね。

私たちも道に迷い、日々不安に苛まれることがあります。その時に、励ましてくれる方がいれば心強いものです。しかし、「行けばわかるさ」とその道の行き先がわからないまま励まされても、不安はなくならないのでは

ないでしょうか。励ますと同時に、その道の先から、ここに来れば大丈夫だよと迎えてくれる方がいることによって、本当に安心できるのではないでしょうか。お念仏の道では、励ましてくれるのはお釈迦さま。迎えてくださるのは阿弥陀さま、そして、親鸞聖人、みなさまのご先祖、先に仏さまになられた方々です。

法事は、お釈迦さまの励まし、阿弥陀さまの願い、親鸞聖人の勧め、ご先祖の思いを聞きます。また、先に浄土に往生された仏さまに会うためといってもよいでしょう。

「悔いのない人生を歩んでくれよ」、「浄土に往生してまた会おう」との声を聞き、日々を歩む力とする。不安な道を往くのを励ましてくれる人、往く先で迎えてくれる人がいる、有難いことです。

初参式報告

報恩講前に、赤ちゃんと姉兄四人揃ってお参り。お友達も参加して賑やかに。小さな手で仏さまに手を合わす姿が微笑ましかったです。

北海道布教の旅報告

二月二十一日より、旭川・富良野の六ヵ寺で布教。暖かい香川から旅して零下十度の世界へ。旭川は零下四十一度の記録が。極寒の中で法要を勤める寺院、ご門徒に頭が下がります。各寺に婦人会があり、熱心なお聴聞、大変有難いご縁でした

真宗教団連合香川県支部第四十七回聞法大会報告

二月十七日、三木町文化交流プラザで開催。残念ながら若新雄純氏の出演は中止に。質問形式で対談、司会進行を務めさせていただきました。

まずは「浄土真宗に興味を持ったきっかけ」。お寺に生まれたからだけではなく、学校の先生、先輩僧侶、お参り先の門徒さん、誰かとの出会いによって仏縁が深まったそうです。みなさまがお念仏するのも、両親、祖父母など、有難い出会いがあったことでしょう。

次に「生の苦しみ、親ガチャについて」。選べないことは苦しいが、人生は親だけで決まるものではない、様々な縁によって変わっていく。孤立を防ぐ、信頼できる人の存在が重要。多くの方と縁を結ぶことが大切です。

次に「老・病の苦しみ、アンチエイジングについて」。老化を防ぐことは良いが、いつかは衰えることを覚悟しなくてはならない。身体ではなく心の年齢が大事ではないか。

次に「死の苦しみ、どのように受け止めるのか」。私の人生という短い時間で捉えるのではなく、脈々と流れていくいのちの中で見ていく必要があるのではないか。死を迎えるのではなく、浄土に生まれ往くのである。

最後に「浄土真宗の魅力をひとことで言えば」。迷信に惑わされない。バチが当たらない。この世は様々な条件で決まっていく。阿弥陀さまの救いは条件なし。これほど有難いことはない。

対談という普段とは違った形で分かりやすく真宗のみ教えを聞くことができたのではないかと思います。